

# あとがきにかえて

日蓮宗現代宗教研究所 主任 高佐宣 長

第十三回日蓮宗化学研究発表大会は、平成二十四年十一月七日、日蓮宗務院で開催されました。この小冊子は、当日の発表内容を収録したものです。

三・一一後、祈り、供養、心、絆といったことばが盛んに交わされました。数多の仏教書が刊行され、宗教ブームとなった感もありましたし、大震災によって葬式不要論が影を潜めたとの指摘もなされました。しかし、大震災から一年数ヶ月を経て、それらが早くも風化の様相を呈し始めているかとも思われます。

三・一一、そして「フクシマ」によって、私たちの布教教化の在り方も問い直されています。今こそ、立正安国の精神を伝えねばならない秋あきなのではないでしょうか。

左記の通り、第十三回日蓮宗「化学研究発表大会」を開催致します。

今回の化学研究発表大会は、「三・一一」「原発」をめぐる問題についての研究発表を中心にして開催したいと考えています。と言っても、単純な「原発・脱原発」「原発推進」の立場からの発言ではなく、化学的観点からの発表をお待ちしています。「立正安国」の思想から「三・一一」「フクシマ」を見るとどうなるのでしょうか。「三・一一」「原発」を通じて、どのような教化が可能でしょうか。ともどもに考えを深める機会にしたいと存じます。多くの方々の発表申込みをお待ちしています。

合掌

「宗報」平成二十四年八月号掲載の発表者の募集には右のように記しました。

現宗研では、所長を中心に、五月八日～十一日に福島・岩手の両県に被災地調査、六月十三日～十五日に岐阜・福井の両県に於いて美浜原発・関連施設調査、八月二十日～二十二日に北海道に於いて泊原発・関連施設調査を行いました。そして、九月の五日～六日には、茨城県水戸市にて、第四十五回中央教化研究会議を「三・一―後の「立正安国」を考える―復興の教化の構築のために」をテーマに開催し、参加者一同で東海村を視察するなど、「三・一―」「原発」の問題を「教化」の問題として受け止め、取り組んでまいりました。

この教化学会発表大会も、その一環として開催することを企図しました。

その結果、震災関係として、「震災天罰論をめぐる」岩田親静師（現宗研研究員）、「首都直下型地震に備える」災害時帰宅支援ステーション池上本門寺構想」小林康洋師（現宗研研究員）、「寺院における災害対策（ICT）を考える」中村龍央師（現宗研研究員）、「根底から揺さぶられたのではないか」森下竜浄師（長崎県日誠寺住職）の発表が、原発関連として、「原発問題を考える―教化の視点から」齋藤宣裕師（現宗研研究員）、「福島原発を理数の観点から考える」萱間顕誠師（徳島県法華寺前住職）「フクシマ」を招いた世代責任を問いつつ梅森寛誠師（現宗研嘱託）、「原発と宗教者」高佐宣長（現宗研主任）、「この世を浄土に―脱原発への提言―」影山教俊師（千葉県釈迦寺住職）の発表がありました。

個々の内容については触れませんが、それぞれの論考をお読み頂ければ、震災を巡る教化上の問題が多岐にわたることを実感して頂けるかと思えますし、原発についても、世間でなされているとは別の論点があることを改めて考えて頂けるのではないかと思います（なお、高佐の発表は、平成二十四年十月二十六日に開催されました第三十六回中部教区教化研究会議での講演「原発をどう捉え、どう伝えるか」のダイジェスト版でありました。この講演録は、

平成二十四年度の「現代宗教研究」に掲載することとし、本「教化学研究」への掲載を見送りましたことを御報告いたします。

慣例の特別発表は、現宗研嘱託である石原顕正師にお願いしました。師は、NPO法人災害危機管理システムEarth理事長としても活躍されておられますが、その実績を評価され、平成二十四年九月、台湾・台北市の国際会議場に於いて開催された「アジアNGOs国際発展会議」にゲストスピーカーとして招かれました。

「真の人道支援への発展を求めて Asia NGOs International Development Conference より」と題する発表は、この招致の事由となりました。東日本大震災の際に、台湾NGOレスキュー隊の被災地受け入れに奔走した経緯や、その後の支援活動について御報告頂いたものです。是非御一読ください。

「教化学研究発表大会」は、日蓮宗「教化学」の確立を目指し、共々に精進する場であり、上述の通り、発表の門戸を、本宗教師はもちろん、寺族、檀信徒にも開いております。

本誌を御高覧頂いた皆さんの、次回大会への御参加を御期待申し上げます。大聖人の教えを広め、立正安国を実現して行く方途について、是非、現場に立脚しつつ現場に埋没しない教化学的な御知見を御発表願えればと念じます。